令和3年度
県南教育事務所重点施策に関する調査結果について

学校教育課通信

令和４年３月３日　第176号

編集・発行：県南教育事務所　鈴木　正和

令和3年度末の調査結果及び本年度の取組等から、県南域内の幼稚園・小・中学校の評価数値と共に、成果と課題を下段に記載しました。自校の調査結果と比較しながらご覧いただき、次年度の学校経営に生かしていただきたいと思います。調査へのご協力ありがとうございました。（〇成果　▲課題（今後に向けて））

1　道徳教育・教育相談体制への支援　（数値目標3．5）

				中間評価平均			最終評価平均		
				幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
(1)	道徳教育の充実	①	児童生徒の実態に応じた別葉を作成し、重点的に指導する内容項目について教職員間で十分に共通認識が図られている。		3.0	2.9		3.2	3.2
		②	多様な思いや考えを引き出すための発問構成を工夫するとともに、目的に応じて効果的に話合いが行われるよう工夫している。		3.0	2.9		3.1	3.9
(2)	教育相談体制の整備	③	児童生徒のニーズに応じた心のケアのため、保護者やSC、SSW、関係機関との連携を密にした教育相談体制が整っている。		3.3	3.4		3.6	3.8
		④	アンケートや教育相談を通して児童生徒の不安や困りごとを把握し、いじめの認知や不登校の予防や改善に努めている。		3.6	3.6		3.7	3.9

〇道徳教育の充実について、教科化に伴い各学校で道徳の研修会を開催したり、道徳教育推進教師を活用したりしてきた**組織的な取り組みの成果**が表れ、小・中学校ともに年々評価が上がってきている。今後も、広い視野から**多面的・多角的に考える学習活動**や、**自己を見つめる（自分のこととして自分とのかかわりで考える）学習活動**を充実させたい。
▲**別葉の活用**については、自校の課題・実態からどのような児童生徒を育成するのかを道徳教育の視点から整理し、道徳科の授業だけではなく、各教育活動との関連を見える化していくことが必要である。
〇SCやSSWを効果的に活用しながら、児童生徒のニーズに合わせ、**ケース会議や関係機関と連携**を図る学校が増えてきている。
▲**不登校の予防や改善**を図るために、具体的な**支援計画**のもとで組織として早期に対応する必要がある。

2　健康課題の解決への支援　（数値目標3．5）

				中間評価平均			最終評価平均		
				幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
(1)	体力の向上に関する取組の充実	①	【幼稚園】「幼児期運動指針」を踏まえながら、全職員で共通理解を図り、取組を行っている。 【小・中学校】「体力向上推進計画書」について、全職員で共通理解を図り、取組を行っている。	3.2	3.2	2.9	3.3	3.3	3.2
(2)	食育の推進	②	「食育全体計画」に基づき、組織的に食育に取り組んでいる。		3.5	3.3		3.7	3.5
		③	食育の授業を実施した学級の割合（該当学級数 ／ 全学級数）		51%	55%		89%	90%
(3)	健康教育の推進	④	健康教育推進のため、自分手帳を活用している。		3.0	3.0		3.2	3.3
		⑤	肥満度50％以上の児童生徒数　＊直近の調査		150人	60人		110人	63人
		⑥	肥満度50％以上の児童生徒のうち、肥満の改善を目指した個別指導を行っている児童生徒数　※肥満度50％以上の児童生徒がいる学校のみ回答		55人	41人		92人	46人
		⑦	【幼稚園】全歯（乳歯＋永久歯）う歯処置完了数　　名／う歯有病者数　　名 【小学校】全歯（乳歯＋永久歯）う歯処置完了数＿＿名／う歯有病者数＿＿名 【中学校】 永久歯う歯処置完了者数＿＿名／う歯有病者数＿＿名	完了数52%	完了数67%	完了数71%	完了数94%	完了数82%	完了数90%

〇全職員で**自校の健康課題を把握**し、その課題解決のための具体的な取組を行っている学校が多く見られた。
〇食育の推進に向けて、栄養教諭・学校栄養職員や外部講師、保護者と連携を図り、組織的に食育に取り組んでいる。
▲昨年度に比べ、**自分手帳**の活用について評価が上がった。しかしながら、各学校において、**効果的な活用法を模索**しているところである。健康課題の解決を図るために、自分手帳の活用の仕方については、さらに工夫改善が必要である。
▲今年度も新型コロナウイルス感染症拡大のため、様々な活動が制限されたこともあり、**肥満児童生徒数は、以前として高い数値**を示している。各学校において、個別指導を行ったり、家庭との連携を図ったりしながら改善を図っているところではあるが、今後も継続した取組が必要である。

3　学級・授業づくりへの支援　（数値目標3．5）

				中間評価平均			最終評価平均		
				幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
(1)	学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントの確立	①	全国学力・学習状況調査において自校採点を行い、児童生徒の課題を明確にし、課題を解決するための具体的な方策を検討し、全職員で取り組んでいる。		3.1	2.3		3.2	3
		②	ふくしま学力調査において、伸びた子どもの学習方略や非認知能力の変化、担任（教科担任）の指導等を分析し、良い取組を職員間で共有している。		2.8	2.7		3	2.8
		③	全国学力・学習状況調査やふくしま学力調査の分析結果をもとに、年間指導計画の見直しを図ったり、授業改善の視点等を再検討したりして、全職員で取り組んでいる。		2.8	2.6		3.1	3
(2)	「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善	④	児童生徒が互いに認め合い、高め合う学習集団づくりに取り組んでいる。		3.4	3.3		3.4	3.6
		⑤	ふくしまの「授業スタンダード」や授業スタンダード「チェックリスト」を効果的に活用した授業改善（特に「まとめと振り返りの充実」）に取り組んでいる。		3.3	3.1		3.4	3.2
		⑥	児童生徒の資質・能力を育成するために、授業においてICT機器・1人1台端末を効果的な場面で活用している。		3.4	3.2		3.6	3.7
(3)	「確かな学力」の向上を支える基盤づくり	⑦	スタートカリキュラムや異なる校種間での授業研究会の実施など、幼・小・中・高の学びの円滑な接続を意識した取組を行っている。	3.5	3.3	2.9	3.4	3.3	3
		⑧	家庭学習スタンダードを自校化したり、それを見直したりするなどして、児童生徒の望ましい学習習慣や生活習慣の確立に努めている。		3.4	2.9		3.3	3.1

〇各校において、学力向上に向けた取組についての共通理解を行い、年間を通した実践が行われた。特に授業づくりについては、**「ふくしまの『授業スタンダード』」の視点に基づいた評価や授業スタンダードを自校化した上で共通実践**を行う学校が多く見られた。
〇ICTの活用についての評価平均が大きく上昇した。各校において**ICTの効果的な活用方法や実践事例の共有**が進められたことが伺える。次年度も、情報モラル教育の推進とともに授業改善のためのツールとして活用を進めたい。
▲各学力調査の分析が進められたが、今年度初めて経年変化を知ることができた「ふくしま学力調査」については、昨年度未実施となった影響で分析に時間を要した面が見受けられた。**分析結果を指導計画や授業改善に反映させること**や、**個々の児童生徒の伸びを認め、励ますこと**を充実させていきたい。

4　特別支援教育の充実への支援　（数値目標3.5）

				中間評価平均			最終評価平均		
				幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
(1)	地域におけるインクルーシブ教育の促進と理解啓発の促進	①	「個別の教育支援計画」および「個別の指導計画」を作成し、情報の共有や進級・進学時の引継等に活用している。 ＊作成する対象は、配慮や支援を必要とする児童生徒全てです。		3.5	3.3		3.6	3.6
		②	障がいのある児童生徒一人一人の実態に応じた、障がいのない児童生徒とお互いが認め合える交流及び共同学習を実施している。 ＊特別支援学級のある学校のみ回答		3.5	3.3		3.8	3.6
(2)	幼児教育、小・中学校、高等学校における特別支援教育の充実	③	特別支援教育コーディネーター等を中心として配慮や支援を必要とする幼児児童生徒の支援策の検討と共有化を図り、役割を明確にして支援を行っている。	3.4	3.2	3.0	3.5	3.2	3.2
		④	全教職員に特別支援教育の理解を図るための研修や役割に応じた専門性を高めるための研修など、計画的に特別支援教育に関する校内(園内)研修を行っている。	3.3	2.9	2.7	3.3	3.1	3.1

○担任間で小まめに情報共有を図りながら、**交流及び共同学習を効果的に実施している**学校が見られた。
○ **「ケース会議」**を実施している学校が増えてきており、学校全体における組織的な対応が進んできている。
○**特別支援教育コーディネーター**が中心となり、校内研修や教育課程の実施に努めている学校が増えてきている。
○**保健師や通所施設**などと連絡を取り合ったり、園内で情報を共有したりしながら、対応している幼稚園が多い。
▲**個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成意義**について改めて認識し、効果的な活用が図られるようにする必要がある。
▲交流及び共同学習に関して、交流はなされてきているので、**共同学習の質的な改善**について意識を高めていくことが望まれる。
▲特別支援学級担任だけではなく、**すべての職員に対して特別支援教育に対する適切な理解**を図っていく必要がある。

5　学校教育を支える基盤への支援　（数値目標3．5）

				中間評価平均			最終評価平均		
				幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
(1)	教職員の服務・勤務の確立と適正な人事管理	①	教職員人事評価について、全教職員が理解し、適切に運用している。		3.5	3.4		3.6	3.7
		②	教職員組織を生かして働き方改革を推進し、職場環境の改善に努めている。	3.0	3.1	3.0	3.0	3.3	3.3
(2)	学校事故防止の徹底と不祥事の絶無	③	校内服務倫理委員会に、工夫改善を加え、効果的な取組としている。		3.3	3.1		3.4	3.4
		④	「信頼される学校づくりを職場の力で」を活用している。		3.6	3.5		3.8	3.6
(3)	開かれた学校づくりと関係機関との連携強化	⑤	地域住民・保護者が、学校の経営方針について理解できるよう広報に努めている。	3.2	3.4	3.1	3.2	3.6	3.4
		⑥	学校評価を適切に行い、その結果を公表している。	3.6	3.0	3.2	3.6	3.6	3.6
		⑦	関係機関との連携に努めている。	3.6	3.6	3.4	3.5	3.5	3.7

○不祥事防止に向けて、カテゴリーごとに担当者を決め、定期的に校内服務倫理委員会を実施している学校が多い。また、**外部講師（警察署等）**を招いたり、**服務倫理だよりを発行**したりし、工夫しながら不祥事防止に努めている。
○新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、各学校で**行事の精選や時数削減、部活動の在り方等**が議論されている。今後も教職員の**働き方の改善**の視点を踏まえた学校独自の働き方を推進していきたい。
○コロナ禍においても、**学校評価や学校だより等**を活用しながら地域や保護者へ情報を発信し、学校と家庭・地域の連携・協働が促進されている。
▲昨年度に比べ**交通加害事故や公務災害**がやや多く見られた。少しの気の緩みが事故につながることを常に意識して生活していく必要がある。

6　幼児教育への支援　（数値目標3．5）

				中間評価平均			最終評価平均		
				幼稚園	小学校	中学校	幼稚園	小学校	中学校
(1)	保育の質の向上と幼小連携	①	遊びを中心とした、幼児が身近な環境に主体的に関わり、試行錯誤したり考えたりすることができる教育環境を整えている。	3.5			3.6		
		②	幼稚園と小学校が保育や授業を参観したり、合同の研究会を設けたりし、互いの教育内容の理解や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の共有に努めている。	3.0	3.0		3.1	3.1	

○保育の質の向上に向けて、園内研修を定期的に設け、**園児の主体的な活動を大切にした保育**を教職員全員で考え、具体的な手立てを講じた保育を実践している。
○園内研修の際には、積極的に県や市町村の指導主事を招き、**研修の充実**を図ろうとする園が見られた。
○園児一人一人の遊びの記録を残し、次時に生かすことで**園児への声かけや環境設定を工夫している園**が見られた。
○ある市町村では、**小学校の低学年担任が幼稚園を訪問し、保育参観、さらには事後研修会にも参加するという取組**が見られた。幼稚園と小学校の円滑な接続を図る上で効果的である。
▲**スタートカリキュラム**を作成する際には、**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿**を参考にしながら、園と小学校の教員が協働することが望ましい。
▲小学校においては、幼児教育と小学校教育の共通点と相違点を理解しながら、**幼児期の教育を通して育まれる資質・能力**を踏まえた教育活動を計画し実施していく必要がある。

いじめは積極的に認知し、組織で対応しましょう。

授業では、「まとめと振り返りの時間」を大切にしましょう。

1年間、ご協力ありがとうございました！